

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770094

研究課題名(和文)1920-50年代の東アジア/日本の言論インフラをめぐる総合的研究

研究課題名(英文)A comprehensive investigation into the platforms of critical discourse in East Asia/Japan between the 1920s and the 1950s

研究代表者

大澤 聡 (OSAWA, Satoshi)

近畿大学・文芸学部・准教授

研究者番号：30712591

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は1920年代から50年代にかけて日本のジャーナリズムで確立された言論インフラや編集技法を主に分析したものである。分析にあたって、同時代の東アジアにおけるメディア・ネットワークの広がりも視野に組み入れた。具体的には、各種インフラの経時的な変容のプロセスを実証と理論の両面から跡づけるとともに、三木清や大宅壮一といった批評家が発表したメディア論の萌芽的形態を詳細に調査した。それらを統合することにより、言論が醸成されていくシステムとその力学とを立体的に把握することが可能となった。

研究成果の概要(英文)：This research analyzes the platforms of critical discourse and editorial approaches that were established in Japan between the 1920s and the 1950s, with a reference also made to the expansion of media networks in East Asia during that period. Specifically, changes in various platforms over time are traced both empirically and theoretically, and media theories advocated by critics such as Kiyoshi Miki and Souichi Oya are investigated in detail. Through synthesis of these elements, a multifaceted understanding of a system that fostered critical discourse has become possible.

研究分野：メディア史

キーワード：言論インフラ ジャーナリズム アカデミズム 批評 論壇と文壇 教養主義 総合雑誌 編集技法

## 1. 研究開始当初の背景

本研究代表者はこれまで、近・現代日本の思想空間に観察されるネットワーク形成の実態をテキストのレベルにおいて解明する作業に従事してきた。1990年代以降の帝国史研究の動向をふまえるならば、人文・社会科学が戦前期および戦時期を対象とする場合に、制度上の諸々の枠組を横断する視座が要請されることはもはや自明である。にもかかわらず、そうした成果はこの20年間、ほとんど蓄積されてはこなかった。

現状を鑑みるに、議論が取り交わされる「環境」や「場」や「空間」の可能性の条件そのものに差し向けられるべき主題論的な分析が欠落していることに最大の要因があると考えられる。出版メディアを機軸とした分析態度を導入しないことには、各種のテキストや言説の作動面やそれが当時の思想潮流に占めた位置は不明のままである。そこで本研究では、帝国史研究以後にありうべきメディア研究の立ちあげに必要な研究基盤を構築するために着手された。より具体的には、東アジア全域へと同時代的に、または時差をともないながら、伝播していく相互交渉的な局面を視野の一部に組み入れつつ、日本の商業ジャーナリズムにおいて言論インフラがいかに形成されていったのかを丹念に調査・解析していく。

## 2. 研究の目的

実証性を重視する本研究は領域横断的なテキスト分析を前提としている。そのこともあって、申請分野である日本文学研究にとどまらず、個別の学問領域においてもそれぞれ質の高い貢献をなすものであると考えられる。また、言論場を構成するメディア群を対象としていることから、歴史学、思想史、政治学、経済学、法学、社会学、文学、科学史など個別に分断されがちな同時代の批評言説を総合的に取り扱うための分析枠組を提示することも可能となる。多ジャンルのクロス・レファレンスの痕跡を析出する作業は、これまで非属領化された問題領域の発見を実現するだろう。最終的には、文学を機軸としつつ、東アジアにおける文学史あるいは言論史といった学的枠組の全面的な更新に接続するための基盤構築も目指されている。

現在まで連綿と続く言論メディアの来歴を精査する作業は、とりもなおさず、デジタル化の推進を含め根源的な再編を迫られる昨今の学問や出版などの発信環境を設計する際に不可欠な検討材料を提供することになるものと期待される。最終的に、東アジア地域間をはじめ、グローバルな学術交流が進行する現在、日本の研究の諸成果を多領域に接続し、トランスナショナルな文脈に位置づけなおすことを可能にする結節的研究とし

ての役割もここでは想定している。

また、本研究が膨大に収集した諸資料を資料集という形態で一般に刊行することも目的のひとつとして設定されている。その点において、次世代の研究者のための調査環境やアーカイブの整備という側面も大きく帯びている。

## 3. 研究の方法

あらためていえば、本研究は近代日本における言論ジャーナリズムの存立機制を分析するものである。あるいは、そうした対象を取り扱うための新たな分析モデルを提起せんと試みるものである。ここでいう言論ジャーナリズムとは、論壇や文壇を中心とした商業ベースの討議空間と出版産業とを総合的に指す。1920年代後半から30年代前半には、論壇および文壇の基盤を構成する各種活字メディア、具体的には総合雑誌や文芸誌、新聞文芸欄が急速な成熟を達成し、1930年代後半から40年代にかけては劇的な再編を遂げるにいたる。そこでは、多領域の混淆した批評言語が交換される場が立ちあがりつつあった。本研究の課題は、そうした空間の力学やメカニズム、プロセスを解析することに設定されている。

詳細な理論的な分析に先立ち、基礎作業として対象期間に発表された主要各誌(総合雑誌に関していえば、『改造』『中央公論』『文藝春秋』『日本評論』の4大誌が中心)の時系列にそった網羅的な調査(=通覧・複写・整理)を遂行する。総合雑誌と緊密な連動関係にあった各種文芸誌や新聞学芸欄へもアクセスする。さらには、ミニマルな媒体や講座もの、単行本へも調査対象を随時広げる。そうした実直な作業を経由するなかで、出版ジャーナリズムの編集原理に検討対象を設定する。それと同時に、言論の場そのものの生成変化の過程を仔細にスケッチする。したがって、個別の記事の記述内容もさることながら、そのデザインや編集方針に着目した調査・分析を行なう。

また、特定の思想家(後述するように一例として三木清)の時事的なテキストを網羅的に解読することによって、時局の変遷とメディアの変遷と思想の変遷とを重合させる。一連の作業のなかで、新資料の発掘も試みる。そうした資料調査を経て、最終的にメディア論や批評理論など先端的な理論を積極的に導入した考察を行なう。

## 4. 研究成果

本研究が達成した具体的な諸成果は、「5. 主な発表論文等」に配列したとおりである。それらが焦点を当てた位相は、おおまかに(1)メディア、(2)思想家、(3)読者の3

系統に区分することができる。それら一連の成果群を有機的に連動させることによって、言論空間の立体的な把握がはじめて可能になる。以下、順に説明していく（言及する表題に添えられた番号は「5」の一覧に対応している）。

#### (1) 言論メディアの生成過程

戦前／戦後の総合雑誌の編集スタイルや編集技法に関する分析を実証と理論の両面から行なった。戦前期に確立された各種言論メディアの実態に関しては、著書『批評メディア論 戦前期日本の論壇と文壇』（図書）においてその生成プロセスを中心に体系的に提示した。具体的には、「論壇時評」「文芸時評」「座談会」「人物批評」「匿名批評」など、現在にいたるまで活用され続けている記事ジャンルを俎上にのせた。それらのフォーマットは1920年代後半から30年代前半のごく短期間に立て続けに誕生し、急速に普及・定着したことが明らかになった。いずれも、言論をマテリアルな側面から強固に規定してきたにもかかわらず、従来まったく顧みられてこなかった位相である。なお、「批評／メディア／マテリアル試論 193510」（論文）は、1935年10月に刊行された、競合し合う4つの総合雑誌をサンプルに、それらの誌面レイアウトや目次構成をフルカラーの画像で紹介しながら、詳細に解説を加えたものである。相互反射する模倣関係のなかで誌面や記事ジャンルが生成していったことがわかる。

このうち、論壇時評については、調査の過程で収集した資料群を『戦前期「論壇時評」集成 1931-1936年』（図書）として編纂・刊行した。「論壇時評」欄は1931年に全国紙にはじめて掲載されて以降、時局が逼迫し言論が強く制約を受けるようになる1936年まで連載は続くが、戦前期における全連載分を複製収録した。これによって、論壇時評という営為が確立していく過程を一望することができるようになった。また、欄の性質上、時々刻々と変化する国内外の思想状況を報告しているため、その変遷もつづさに確認することを可能にする基礎資料となる。解説では、いわゆる「論壇」は実態として存在するものではなく、論壇時評という論壇を観測する営為によってはじめて存立させられるのだという転倒した要件を強調した。

1930年代に輪郭を可視化させた論壇がその後どのような転変を辿ったのかを確認すべく、『流動』 総会屋雑誌と対抗的言論空間』（図書）も発表した。30年代型の論壇の生成と同型のプロセスが1945年以降に再度反復され、再形成し終えた60年代後半から70年代にかけては、新たなフェーズへと突入することになる。その過程を『流動』というマイナーな言論誌を例に跡付けた。さらにその先、1980年代の論壇状況については、「批評とメディア 「史」に接続するため

のレジュメ」（論文）で概説した。批評の中心が文学から社会科学を含む多領域へと拡散していく軌跡をメディアに着目しながらスケッチすることができた。ちなみに、論壇の先行モデルとして、「文壇」があるが、その歴史の変遷を明治期に遡って現代までを対象に総合的に論じた特集「文壇のアルケオロジー」（論文）の企画立案をはじめ、すべての編集業務にあたった。意外なことに、文学研究方面でもこれまでまとまったかたちで着手されてこなかった主題である。

一連の分析方法に関する問題関心は、「編集を批評するということ」（発表）および、「雑誌メディア研究の現状 日本の論壇雑誌を事例として」（発表）で報告した。なお、『批評メディア論』は日本マス・コミュニケーション学会賞と日本出版学会奨励賞の2つを受賞し、学術的に高い評価を受けた。また、全国の紀伊國屋書店が主催するじんぶん大賞の3位にも選出されたほか、多くの全国紙にそれぞれ書評が掲載されるなど批評書としての評価も受けることができた。

#### (2) 思想家たちのメディア戦略

前掲『批評メディア論』では、評論家の大宅壮一のメディア論の萌芽ともいえる批評活動と、逐次のジャーナリズム観測とが同時代における重要な補助線として全面的に機能していた。進化し続けるメディア空間を思想家や書き手たちがどのように観察し、立ち回っていたのかという問題は、いささか世俗的でありながら、思想が醸成される基盤を考えるうえできわめて重要である。そこで、本研究ではサンプルとして、哲学者で批評家の三木清に焦点を当て、メディアと思想家の接面を明らかにした。その人選理由としては、1920年代から30年代にかけて、論壇の寵児として華々しい執筆活躍を見せると同時に、水面下では講座や新書、全書、思想誌（『思想』や『新興科学の旗のもとに』『知性』など）といった新たな言論インフラの開発に大きく貢献したという類まれな存在だからという点が挙げられる。

三木が岩波書店の社主である岩波茂雄に宛てた大量の未公開書簡の現物を調査・解析し、「編集する三木清 未公開資料・岩波茂雄宛書簡と「続哲学叢書」の周辺」（論文）および「同 未公開書簡と「岩波講座 世界思潮」の周辺」（論文）にまとめた。そこでは、資料紹介を行なったほか、当該未公開資料を積極的に援用することによって、これまで正面から分析されてはこなかった三木の編集者としての顔を仔細にスケッチすることが可能となった。また、三木がメディア刷新の機会を上手く使って、思想界の世代交代を試みていたことなども明らかになった。その一例が上述の論文で取りあげた「続哲学叢書」や「岩波講座 世界思潮」だった。

さて、1920年代後半、各大学でいわゆる左

傾分子の追放が大々的に執行され、追放された知性はこぞってジャーナリズムへと浸入する。かくして、アカデミズムからジャーナリズムへの絡路は確立され、大学の外部に新たな知の潮流が形成されはじめる。三木は一連の流れを促進したもっとも代表的な人物であり、同時に事態を時事的なテキストのなかに克明に記録してもいた。ところが、そうしたテキストは哲学者である三木にとってあくまで副次的なものであるとして、これまでまともに分析の俎上にのせられてはこなかった。そこで、アカデミズムとジャーナリズム、論壇と文壇、メディアと運動といういくつかの境界画定の更新を三木がどのように捉えていたのかを時系列順に、またテーマ別に精査する作業も行なった。その成果として、『三木清教養論集』(図書)、『三木清大学論集』(図書)、『三木清文芸批評集』(図書)の3冊を編集・刊行した。いずれにも長い独立した解説文を付し、三木と周囲の人物たちとのネットワーク関係も炙り出すことに成功した。時事的なテキストを順に精読することによって、時局とともに変化するアジアへの関心の変容プロセスも明らかにすることができた。

上記3冊の編集過程において、膨大な資料調査を行なった結果、いくつかの全集未収録文を発見することもできた。「邂逅と教養」(論文)や「編集と教養 三木清全集未収録文について」(論文)においてその一部を紹介した。また、三木は大学の内部ではなく外部、つまり自分の位置するジャーナリズムの側から各種議論を展開し、最終的に戸坂潤らと同様、「民間アカデミズム」の構想に行きつくわけだが、そうした議論を戦後、大学の側から批判的に(間接的に)展開したケースとして、政治学者の丸山眞男の言説も分析した。それは「アカデミズム、ジャーナリズム、ディレクタントイズム 丸山眞男の文体論に向けたメモランダム」(論文)として発表した。そこでは、1930年代の言論インフラが1950年代にいかにか引き継がれたか、その連続面がポイントのひとつとなっている。

### (3) 出版大衆化時代の読者

前掲の『三木清教養論集』をはじめとする3冊に収録された論考群からも明らかのように、三木のような哲学者によるジャーナリスティックな活動自体が可能となった背景には、1920年代後半からの「出版大衆化」現象と、1930年代の「教養主義ブーム」現象とがある。いわば、高等教育が急速に大衆化した結果、知的なアイテムにアクセスする一般読者が急増し、それゆえに出版ジャーナリズム異様なまでに成長を遂げることになったのである。そうした言論や思想を受容する側の問題を従来の読者論的なアプローチではなく、メディア論や教養論の角度から吟味する作業も本研究では行なった。

出版大衆化を象徴する1920年代半ばの日本ブーム、さらにそれに続く戦後の文学全集ブームの歴史的な意義と経緯とを「出版大衆化の果て」(論文)では詳細に整理した。そこで最終的に指摘したとおり、1970年代には出版大衆化のプログラムが完遂し、つまり全国の末端にいたるまで教養主義のモードが行き渡り、その結果、竹内洋の指摘する「教養主義の没落」現象が出来た。編著『1990年代』(図書)や「八〇年代日本の思想地図 外部と党派性、あるいは最後の教養主義」(図書)は、まさにそうした「崩壊」以後の教養主義のあり方をメディア環境と連動させながら論じたものである。それらによると、1980年代のいわゆる「ニュー・アカデミズム」現象は教養主義のパロディとしてしかありえず、さしあたって「最後の教養主義」「昭和末期教養主義」と評定することができる。1990年代になれば、それはパロディとしてさえ存立しえず、世界的な「大きな物語」の崩壊とともに、個別ディシプリンのセグメント化や島宇宙化が進行し、アカデミズム回帰が進むことになる。上記の2点の仕事ではそのプロセスをキープレイヤーとなる固有名や象徴的ないくつかの出来事と絡めながら整理した。「ポスト文学史のアクチュアリティ 正史解体後の展望」(発表)では、そうした観点からこの時代に関する提言を行なった。

また、『教養主義のリハビリテーション』(図書)は、読者と教養をめぐる問題の変遷を「大正教養主義」として教養主義が発動した1920年代から、それが壊滅した先にあたる2010年代の現代にいたるまでの動向を3人の識者とともに詳細に共同討議したものである。そこでは、日本型教養主義が立身出世と分かちがたく結びついていたことをはじめ様々な論点を確認された。

以上の(1)メディア、(2)思想家、(3)読者の3つの側面からのアプローチを総合することによって、1920年代から50年代、さらにはそれを超えて1980年代、90年代における日本の言論空間の立体的な構造把握が可能となった。その体系を構成する諸成果が個々の業績において提出されるところとなった。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計14件)

大澤聡「読書の消滅」、『世界思想』(世界思想社)第45号、2018年、46-49頁、査読無

大澤聡「編集する三木清(中) 未公開書簡と「岩波講座 世界思潮」の周辺」、『図書』(岩波書店)第830号、2018年、20-25

頁、査読無

大澤聡「編集する三木清(上) 未公開資料・岩波茂雄宛書簡と「続哲学叢書」の周辺」、『図書』(岩波書店) 第 826 号、2017 年、14-20 頁、査読無

大澤聡「邂逅と教養」、『本』(講談社) 第 42 巻第 5 号、2017 年、6-7 頁、査読無

大澤聡「編集と教養 三木清全集未収録文について」、『群像』(講談社) 第 72 巻第 4 号、2017 年、234-235 頁、査読無

大澤聡「新たな対話論のためのメモランダム」、『精神看護』(医学書院) 第 20 巻第 1 号、2017 年、56-63 頁、査読無

大澤聡「文壇のアルケオロジー」、『文学』(岩波書店) 第 17 巻第 3 号、2016 年、2-3 頁、査読無 \*特集全体の責任編集

大澤聡「Re: 機能性文学論」、『at プラス』(太田出版) 第 28 号、2016 年、190-205 頁、査読無

大澤聡「批評とメディア 「史」に接続するためのレジューム」、『ゲンロン』(ゲンロン) 第 1 号、2015 年、36-47 頁、査読無

大澤聡「批評/メディア/マテリアル試論 193510」、『idea』(誠文堂新光社) 第 370 号、2015 年、113-117 頁、査読無

大澤聡「出版大衆化の果て」、『kotoba』(集英社) 第 20 号、2015 年、52-55 頁、査読無

大澤聡「批評の全体性について」、『すばる』(集英社) 第 37 巻第 2 号、2015 年、192-207 頁、査読無

大澤聡「アカデミズム、ジャーナリズム、ディレッタントイズム 丸山眞男の文体論に向けたメモランダム」、『現代思想』(青土社) 第 42 巻第 11 号、2014 年、246-256 頁、査読無

大澤聡「デジタルとヒューマニティの交差点」、『DHjp』(勉誠出版) 第 3 号、2014 年、83-88 頁、査読無

〔学会発表〕(計 4 件)

中山弘明、安藤宏、松本和也、中谷いずみ、大澤聡「ポスト文学史のアクチュアリテイ 正史解体後の展望」、『日本近代文学会 2017 年秋季大会、愛知淑徳大学星が丘キャンパス、2017 年 10 月 14 日

大澤聡「編集を批評するということ」、『日本出版学会賞記念講演会、専修大学神田キャンパス、2017 年 3 月 10 日

谷本奈穂・高井昌史・柳原伸洋・大澤聡・福岡良明「ポピュラー・カルチャーと戦争の 70 年」、『日本マス・コミュニケーション学会 2015 年度春季研究発表会、同志社大学今出川キャンパス、2015 年 6 月 13 日

山本昭宏・片山慶隆・大澤聡「雑誌メディア研究の現状 日本の論壇雑誌を事例として」、『日本マス・コミュニケーション学会 2014 年度秋季研究発表会、東洋大学白山校舎、2014 年 11 月 8 日

〔図書〕(計 11 件)

大澤聡『教養主義のリハビリテーション』、筑摩書房、2018 年、総 224 頁

大澤聡編『三木清文芸批評集』、講談社、2017 年、総 320 頁

大澤聡編『1990 年代論』、河出書房新社、2017 年、総 336 頁

大澤聡編『三木清大学論集』、講談社、2017 年、総 320 頁

大澤聡編『三木清教養論集』、講談社、2017 年、総 272 頁

奥泉光編『文藝別冊 夏目漱石 百年後に逢いましょう』、河出書房新社、2016 年、総 224 頁、\*担当:大澤聡「思想家たちの漱石 戦前期編」、165-193 頁

斎藤美奈子・成田龍一編『1980 年代』、河出書房新社、2016 年、総 400 頁 \*担当範囲:大澤聡「八〇年代日本の思想地図 外部と党派性、あるいは最後の教養主義」、151-164 頁

大澤聡『批評メディア論 戦前期日本の論壇と文壇』、岩波書店、2015 年、総 360 頁

河野有理編『近代日本政治思想史 荻生徂徠から網野善彦まで』、ナカニシヤ出版、2014 年、総 432 頁 \*担当範囲:大澤聡「イロニー 保田與重郎と伊東静雄」、259-290 頁

大澤聡編『戦前期「論壇時評」集成 1931-1936 年』、金沢文圃閣、2014 年、総 636 頁

竹内洋・佐藤卓己・稲垣恭子編『日本の論壇雑誌 教養メディアの盛衰』、創元社、2014 年、総 352 頁 \*担当範囲:大澤聡「『流動』 総会屋雑誌と対抗的言論空間」、245-270 頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大澤 聡 (OSAWA, Satoshi)

近畿大学・文芸学部・准教授

研究者番号: 30712591